

戦争の社会病理 3 — 渡嘉敷島で処刑された6名の伊江村民

麦 倉 哲*

序：〈問題関心〉

本論は、太平洋戦争中の渡嘉敷村渡嘉敷島において伊江村の青年男女が日本軍によって殺害された事件について、筆者がこれまでに実施した聞き取り調査や資料分析の結果から解明したものであり、太平洋戦争中における戦死・戦没を、社会病理学の観点で解明するものである。

ただし、戦時中の理不尽な死と向き合うものであるが、個別の誰かの責任を追及するものではない。戦争に付随して、日本で起きた戦争あるいは日本軍がかかわって起きた戦争中の出来事としての死を解明し、一人ひとりの死の検証を通して、構造的な要因がからんでいることを解明したいのである。

戦争の犠牲を忘れ去らないために、全国各地で取り組まれ、とりわけ沖縄県の多くの市町村で実施されている戦争体験記録化や刻銘碑への記載などは、犠牲死と向き合う取り組みである。しかし、ひとりひとりの死の解明は、依然として未解明の部分が多い。解明の途上であるどころか、端緒の程度にとどまっている。生き残った者だけが謳歌する世界であったり、死んだら終わりの世界であれば、命の犠牲は繰り返されるであろう。戦災における犠牲死をみつめ、リフレクティブに検証を積み上げ、そのうえで人類や社会の展望を見出したい。

戦時下では、国民の誰しもが生命を危険にさらされる状況におかれる。しかしながらしばしば、上位の者は生命を奪われる危険の度合いに極端な格差をつくろうとする。自らの命のリスクから相対的に逃れるためである。戦時下の最大の格差は「命の格差」である。この点の解明なくして戦争を語ることはできない。戦争で何が起きたのか。戦争を災害としてまた社会の病理として、「命の格差」に焦点を当てた解明が尽くされる必要がある。

1 論文テーマ：対象と方法

本論文は、太平洋戦争下の沖縄県渡嘉敷村で起きた戦災犠牲死について、災害検証の視点で解明しようとするものである。これまでに、①日本兵によって処刑された渡嘉敷村民（注1）、②渡嘉敷島で亡くなった朝鮮人軍夫（植民地下で徴用され軍に配属された朝鮮人軍属）について解明を進めてきた（注2）。そして本論文は③伊江村民の死を対象とする。

* 岩手大学教育学部社会学研究室

（注1）麦倉哲「戦争の社会病理—日本兵によって処刑された沖縄県民—」（『岩手大学教育学部研究年報』第79巻、2020年、109—123頁）参照。

（注2）麦倉哲「戦争の社会病理—日本軍によって処刑された朝鮮人軍夫—」（『沖縄法政研究』第23号、2021年、1—27頁）参照。

本論文は、これまでに解明された知見をベースに、渡嘉敷村ならびに伊江村住民および元住民への戦争体験聴き取り調査ならびに両村の戦死・戦没関連の各種資料分析の結果に基づくものである。標題の6名の死について、遺族・近親者を含む戦争体験者から、戦時下での伊江島や渡嘉敷島での経過について、双方の村民の受け止め方なども比較考察した。伊江村は、沖縄本島の市町村以外では、渡嘉敷村に次いで、戦災死亡率が高い。渡嘉敷島と伊江島で共通していることは、軍が配置されたことと、米軍の上陸作戦が実行されるのを機に、集団自決（強制集団死）が起きたことである。

(1) 伊江島の戦没者

伊江村の戦没者は、沖縄県平和の礎刻銘者数のデータ（2021年3月）によれば、2837人である（注3）。太平洋戦争前の従前人口は、1940年国勢調査によれば、6816（約6800）人である（注4）。日本軍は戦争を開始してから、沖縄戦開始直前の2月26日の軍命により開始された。これにより約3000人が本島へ疎開（14歳以下は疎開してよい）し、約200人が本土へ疎開したという。一方で、約3600人は疎開しなかった（許されなかった）。強制的に軍に協力することが残った住民には求められ、連合軍（以下「米軍」）との戦闘期間中に1500人が戦死・戦没（4月16～21日）した。そして、米軍の捕虜となった2100人の住民は慶良間諸島へ（1700渡嘉敷島、400慶留間島）と強制移動させられた。

伊江島の戦いの中で命を長らえた2100人はその後、慶良間での苦難を経験する（1945年5月～46年6月）。その後さらに慶良間諸島から本島へ移ってからも死を経験する。伊江村へ帰還する前に今帰仁に留め置かれた期間にマラリアの流行を経験する。2020年から2022年のコロナ感染症を経験した世界の情勢に鑑みれば、慶良間諸島（渡嘉敷島や慶留間島）から本部への移送において超過密の船で移送されたことも感染拡大に響いたのではないかと想像されるのである。本部・今帰仁での避難生活期間は1946年6月から47年3月まで続いた。かくして伊江島を離れてから約2年後に、捕虜となったり、強制疎開をさせられた住民が伊江島へと帰還する。

伊江島での死が約1500人、伊江島以外の死は1337人（しょう兵の死、慶良間の死、今帰仁の死）である。こうした経験をして、伊江島での戦闘から2年の歳月を経て、伊江村民は島に戻ることができたのである。伊江村民の戦死・戦没者の合計は2837人であり、これを伊江村の1940年の国勢調査人口で除すると、 $2837 \div 6816 = 41.6\%$ となるのである。戦没者人口比率は41.6%となる。

伊江村は、戦後、島の慰霊の塔（芳魂の塔）の建立に合わせて刻銘碑をつくり、上記の犠牲者の名を刻銘した。刻銘者の数は、軍戦死者に、住民戦没者を加えて4161名となる。その後、追加2名を加えて、2020年4月現在の刻銘者数は、4163人である。（注5）

（注3）沖縄県資料参照。「平和の礎刻銘者数」（2020年6月22日付）、伊江村は2837名、渡嘉敷村は590名となっている。

（注4）「昭和15年国勢調査—人口総数・男女の別・年齢・配偶の関係・民籍または国籍」

世帯および男女別人口（全人口）—全国、道府県、郡、市区町村

（注5）伊江村「伊江島戦史抄」および戦没名簿関連資料による。

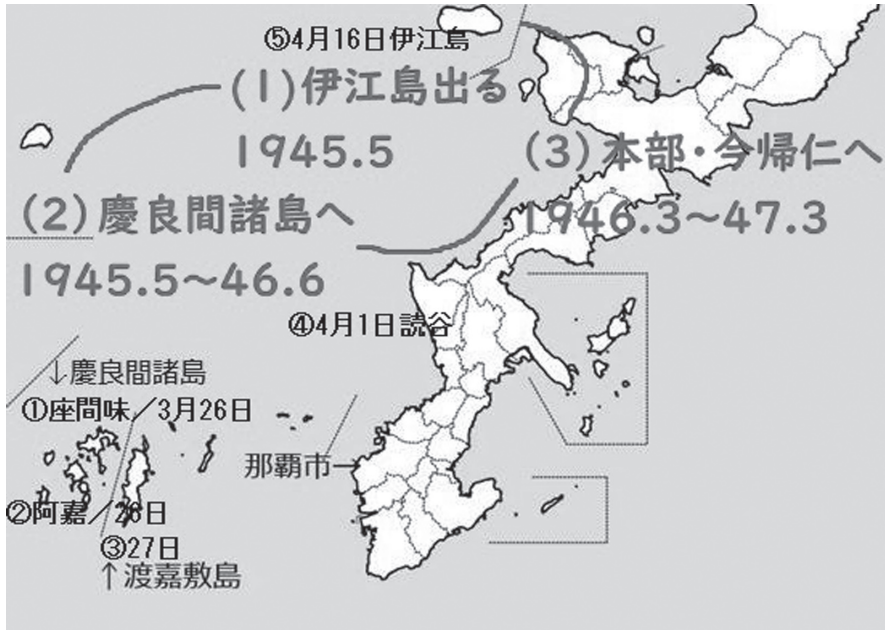


図1 ①伊江島—②渡嘉敷—③本部・今帰仁の配置図

米軍による沖縄への上陸作戦は、1945年3月23日の慶良間諸島への大空襲に始まり、空襲と艦砲射撃に続いて、3月26日からの座間味島への上陸、③渡嘉敷島への上陸である。攻撃から数日にして、慶良間諸島を掌握した米軍は、事実上は制覇しつつも、深追いすることなく、次の目的地へと侵攻する。本島の読谷村と日本軍が飛行場を建設した伊江島である。伊江島での戦闘は、多くの犠牲者を出して4月16日に決着する。

(2) 渡嘉敷の死の外因：捕虜の安全を欠いた慶良間への強制移送 —慶良間諸島へ2100人(渡嘉敷島1700、慶留間島400人)

伊江村民はなぜ渡嘉敷村で命を落とすことになったかということ、まず第一に、米軍による作戦行動がおおいに関係している。太平洋戦争も末期になり、米軍は日本列島への上陸作戦を開始する。1945年3月末に慶良間諸島を事実上制圧した米軍は、次に本島読谷村と伊江島へと進む。伊江島での戦闘で生き残った村民は、渡嘉敷島や慶留間島へと強制移送させられた。米軍は、捕虜となった伊江村民を日本軍が降伏したわけではない渡嘉敷島へと移動させ、米軍の上陸作戦から逃れるために自宅を放棄し山中へと避難した渡嘉敷村民の住宅に住ませたのである。米軍のありあわせの捕虜収容対策は、捕虜の安全への配慮を著しく欠いた対応であり、犠牲死を生む第一の原因であった。

(3) 戦争体験者の聴き取り調査および資料分析

実際に伊江村の6人男女の生命を奪ったのは日本軍である。日本軍はいったいなぜこの日本国民の命を失わせたのであろうか。これまでに分かっているのは、伊江村の6名が山中に避難している渡嘉敷村民に投降勧告に向かい、結果として、日本兵により処刑されたり自害を求め

られたりしたというのである。では誰がどのようにして犠牲となったのか、戦争体験者への聞き取り調査ならびに関係資料の分析により明らかにしたい。

表1 聞き取り調査対象者(伊江村聞き取り2018～2020年)

証言者	年齢性別	犠牲死者との関係
証言者A	90歳代女性	3人の伊江村女子青年の親友
証言者B	80歳代男性	犠牲死者の家族
証言者C	80歳代男性	犠牲死者男性との近親者
証言者D	80歳代男性	防衛召集の父は米戦車へ突撃。爆弾三銃土遺族
証言者E	80歳代女性	家族3人が戦死・戦没、渡嘉敷不発弾できょうだい犠牲
証言者F	80歳代女性	住民疎開、本島で戦火を経験
証言者G	90歳代男性	伊江村で墓や壕を転々と避難を経験

表2 渡嘉敷村での聞き取り対象者(渡嘉敷村聞き取り2012～2020年)

証言者	年齢性別	犠牲死者との関係
証言者H	80歳代男性	赤松隊本部近くにいた者
証言者I	90歳代女性	軍務に精励した経験者

2 文献調査、これまでに解明されたこと

(1) 『海上挺進第三戦隊陣中日誌』(1945辻版、勤務隊辻中尉が記す)

伊江村民の男女6人が渡嘉敷島で処刑されたことについては『海上挺進第三戦隊陣中日誌』(1945辻版、勤務隊辻中尉が記す)では、一言も触れられていない。戦隊の勤務日誌として書かれたという趣旨のせいなのか、あるいはこの事件を軽視したか、正当化できなかったかであろう。

(2) 『慶良間列島渡嘉敷島の戦闘概要』渡嘉敷村遺族会(1953年3月28日)

伊江村6人の処刑について記した伊江村内の公式(半公式)文書としては、『沖繩戦記』(座間味村渡嘉敷村戦況報告書)(発刊時不明)と『慶良間列島渡嘉敷島の戦闘概要』渡嘉敷村遺族会(1953年3月28日)がある。両書の文面は似通っているが、子細にみると文面の相違もみられる。前書は開戦時の渡嘉敷村長、役場職員、防衛隊長らの協力で書かれたとある。そこには、次のように記されている。

「赤松隊は極度に食糧欠乏し、若い下士官や将校は夜間切込みと称して米軍食料集積所を襲い食糧、煙草等を確保する様になった。そのために米軍は各要所に地雷を敷設した。鈴木・小松原両少尉はその犠牲となった。伊江島住民は米軍の保護を受けつつ渡嘉敷部落の焼け残った家屋で生活していた。米軍の要求により伊江島住民から選ばれた若き青年男女六名が赤松隊へ派遣された。それは戦争が既に日本の不利であり降伏することが最も賢明な策であることを伝えるためであったが赤松隊長は頑固として聞き入れず六名の者を斬殺した。」(『沖繩戦記(座間味村渡嘉敷村戦況報告書)』)

「赤松隊は極度に食糧欠乏の日が目立って来た。下士官や将校は夜間切込みと称して米軍の食料集積所を襲い食糧、煙草等を確保する様になった。その為に米軍は各要所所に地雷施設

						伊江島	(男女) 2	住民	処刑		
						伊江島	(男女) 3	住民	処刑		
						伊江島	(男女) 4	住民	処刑		

*「赤松部隊『陣中日誌』の原本と改本」(15年戦争@ wiki, 暫定版2009.9.18更新)より作成。

表3は、サイト・15年戦争@ wikiにおいて作成された、辻版と谷本版との比較の表で、戦死者の記録の該当部分である。谷本版では、史実を明らかにするために、6名の処刑を陣中日誌に書き加えた。しかし、これが史実だとすれば、名も知らぬ人が処刑されているのである。名前のみならず、性別も不確か、そして日時も。誰がいつ、どのようなかどでどのように処刑されたのか、壕の中にいた将校にはわからないのである。当初は、記録にのこさずに、処刑したが、「戦闘概要」が出たため、事実化し、権威をもちいて、あらたに社会的に構築したものである。

これは、朝鮮人軍夫の場合と同様に、人の扱いをしていないのである。「障害者施設の殺人被害者」の名前が明かされないと似ている。「命のアンダークラス」ができあがっている。戦争における死と向き合わずに戦後を歩んできた一面が、ここにかがえるといっても過言ではない。

3 調査からわかったこと一氏名

(1) 6人の氏名・性別

処刑された6人とは誰か。伊江村住民の証言でたどるしかない。伊江村の証言者A～Gの証言から、①儀間イリエ(名簿では「いりえ」)、今村ヨネ、安里ヤス、具志川セイゼンという4名の氏名を知ることができた。シリモウやシリモンヤという名前も出たが、これは「具志川」さんの屋号であることがわかった。現時点では、女性3人、男性1人が確定し、あとの2人は不明である。

川田文子は、伊江村民、渡嘉敷村民への聴き取りから、伊江島6人の名前と処刑の状況について、明らかにしようとした(注6)。

(2) 伊江村、戦没者名簿調査

筆者は、学術目的で「伊江村戦没者名簿調査」を実施した。名前の挙がった4名を確認すると、女性①儀間イリエ(名簿では「いりえ」)、女性②今村ヨネ、女性③安里ヤス(名簿では「安子」)、男性④D具志川セイゼン(名簿では見当たらず「金一」か)という4名は確認できた。男性一人については、一致する名前が見当たらず、今後さらに精査が必要である。ここでは推定で「具志川金一」に該当するのではないかと推定した。証言によると、兵隊の年齢でない年配男性で、兵隊経験者であることから、48歳という年齢は当てはまる。当時は、45歳までが徴兵の対象であったからだ。また、死亡場所は「慶良間渡嘉敷」となっていることも符合する。

証言と戦没者名簿では名前のほか、いくつかの事項で違いがある。今村ヨネさんの性別が「男」

(注6) 川田文子「刻銘なき犠牲 沖縄にみる軍隊と 岩波書店、274～285頁。
性暴力 第二回 住民虐殺」『世界』2015年10月号、

となっているのは誤記であろう。死亡場所については女性の2人が伊江村となっているのは誤りである。儀間イリエさんと具志川金一さんが正しいと思われる。身分については安里ヤスさんが「雇人」となっていて、社会人であったということである。死亡年月日と戦没の状況については、儀間イリエさんの記載が正しく、他の3人にも当てはまると思われる。以上のことから、戦没者名簿の記載内容についても、特に、伊江島以外での戦没者については、さらなる精査が必要と思われる。

表4 伊江村戦没者名簿

性別	氏名	性別	生年 (西暦)	年齢 ※1	死亡場所	身分	死亡年月日	戦没の状況
女性①	儀間 いりえ (イリエ)	女	1927年	18	慶良間	一般住民	1945/06/06 →正しいと推定	日本兵の虐殺 →正しいと推定
女性②	今村 ヨネ	男 →誤記	1927年	18	伊江村 →誤記	一般住民	1945/04/19 →誤記	被弾
女性③	安里 ヤス (安子)	女	1926年	19	伊江村 →誤記	雇員43.00	1945/04/19 →誤記	被弾
男性④	具志川セイゼン	男						
≡男性 D※2	具志川 金一	男	1897年	48	慶良間 渡嘉敷	一般住民	1945/04/20 →誤記	被弾
男性②	シリモンヤ、 シリモウはD の屋号							
男性③								

4 呼びかけに行く状況

(1) 渡嘉敷村民を助けようと

伊江島の6人は、男・女3人ずつかもしれないし、もしかしてそうでないかもしれないということである。徴兵の年齢である20歳から45歳までの男性が徴兵された結果、住民捕虜の中にほばいないことを考えると、女子青年がこうした場面においても積極的に活躍したと思われる。男性ばかりで、下山・投降呼びかけ・勧告に行くことは、危険との判断もあって、女性が主流となって編成されたものである(Cさん証言から)。

男性④の具志川さんは青年ではなく中年であり、兵役年齢を越えたおじさんであることから「青年男女」ではないこともわかる。証言者Aさんの証言からは、Aさん自身も、呼びかけに参加するかどうか検討中で、家族の了解をえられれば合流する予定であったという(Aさん証言から)。

(証言者Cさん)

C「・・・白旗掲げて先頭になっていった男の人は、(自分の)叔父さんにあたる人が行ったんだが、具志川とって、この人はお父さんの弟でね、もう(それで)亡くなりました。具志川セイゼンって人がね、・・・」

C「伊江島でこの島では、(具志川さんが壕に身を隠している村民をみなを説得して)投降してもらったんだけど、そうかと思って(渡嘉敷でも村民が身を隠して避難しているのだから)

向こうまで行って(説得して命を救って)やろうとしたらね、あれが違うんですよ。こちらは] 麦「こちら(伊江島)では投降勧告してたくさんの人助けた経験があったわけですね」 C「そうですね」

〈証言者Aさん〉

麦「みんなは具志川さんの呼びかけで渡嘉敷の人を救おうと思って山に行った？」

A「助けようと言ってね。みんな行ったけど、間違っって赤松隊がいる陣地の方向に行ったらしい。」

伊江村民は、山に身を隠している渡嘉敷村民の命を救おうとしたのである。しかし、客観的にみれば、米軍の了解なしには、できないことであったから、米軍はどのような指示や了解を出していたのであろうか。この点は不明である。とはいえ証言者の話からは、米軍の命によって行かされたわけではなく、自発的な部分が多かったと思われる。

伊江島からの避難した者の経験では、たくさん伊江村民が壕で米軍の攻撃により、また集団自決(強制集団死)によって命を落としている。こうした中で、投降したことで、自分たちの命が損なわれずにすんだという、自分たちの直近の経験なのである。

そして、具志川さんは勇気をもって、先頭に立って白旗をあげて投降することで、壕にこもっていた伊江村民を助けた経験がある。渡嘉敷村民が、このままでは自決をするのではないかも危惧し、渡嘉敷村民に山を下りてくるように伝えたいと思ったのである。

女子青年たちも、戦争がひと段落していた今、渡嘉敷村民の命を救うことこそ、自分たちが率先して、人のためにすることだと、頭を切り替えていた。そして、米軍の作戦により、渡嘉敷村民の住宅に住まわせてもらっている立場から、本来の家の主が山にこもっていることに心を痛め、山に迎えに行きたかったのである。

(2) 親と相談しないで行った

伊江村の一行は、自発的に行った。家族にも断らずに行ったようだ。行った先で、拘束され、処刑されるとは想像していなかったであろう。

〈証言者Aさん〉

A「1人はね、このひと(具志川さん)にみんな連れていかれた、女3名もね。私も一緒に行こうと言われたけど、私は家族に断わってくると言ってね、もう帰らなかったから(集合した場所にすぐに戻らなかったから)、この人たちは行ったんです。」

〈証言者Bさん〉

B「相談しないで行った。たぶん相談してれば止めたと思います」

(3) どういう人 ヨネさん

証言者のAさんによれば、一行の中で、ヨネさんだけは、考えが少し異なっていたという。夫は出征して戦地にいる。夫の出征に恥じぬように、捕虜にならずたかうという気持ちを持っていたのではないか。その気持ちと、日本人を救うためにということと、どのように重ね合わせていたのだろうか。ヨネさんは身ごもっていて、夫にそのことを伝えたい。子どもが生まれ

たら、夫に見せたいと思っていたらしい。

〈Aさんの証言〉

A「ヨネさんはね、旦那が兵隊に行ってるでしょ。捕虜になりたくないと言ってました。当時捕虜になったらアメリカにどうされるこうされるということみんな言ってましたからね。ヤスさんとイリエさんはそんなにではなくて、ヨネさんに行こうといわれたかもしれない。私にもね、ヨネさんが行こうと言ってましたから。」

麦「ヨネさんがAさんにも一緒に行こうって誘ったのですね。」

A「ヨネさんの誘いで行ったかもわかんない。これはわかりませんがね。ヨネさんが私を誘っていたんですよ。家も近かったしね、空襲のときは一緒の壕に入りましたからね、仲良かったんですよ。」

〈Bさんの証言〉

B「これは結婚していたのかヨネさんの夫です。で兵隊に行ってるものですから、ヨネさんは投降勧告にいくときに誰かに話したそうです。Aさんに言ったのかね。「妊娠してること、もし会ったら伝えてください」と言ったそうです。」

麦「この夫のほうは。」

B「妊娠してることは知らないです。」

5 なぜ、どのように処刑されたか

(1) 住民のほうでなく、軍本部のほうへ行った

山を登るにあたって、ウンナガーラを経由して行ったのか、それとも、イッピザーラの川筋を登って行ったのかは不明であるが、イッピザーラを登って途中から赤間山の手前の沢沿いを右に向かえば、赤松隊の本部に着く。しかし、どちらのルートで上がっていても、途中で、斥候の前線の兵隊や見回りの巡査に遭遇すると思われるので、途中から連行されたであろうと思われる。

〈Aさんの証言〉

A「道案内する人いなくて自分たちで行ったからね。住民のいる道を歩かないで、軍が日本軍が陣地作ってる陣地に向かってっらしい。」

(2) 処刑される前に

連行された後で、どのように処刑されたのか。具志川さんの考えを想像すれば、戦況を説いたであろう。ヨネさんは、むしろ一緒に戦おうと思ったであろう。それでも、スパイだからと断罪されると、その前に、親に合わせてほしいと、ヤスさんは懇願したのではないか。しかし、スパイなので返すわけにはいかないという命令になったのでであろう。そのおおまかな様子は、村民の防衛隊の幹部はうかがっていたようで、終戦の間際に村民が大挙して山を下りてきて、伊江村民と合流した時に、様子を聞いたらしい。

〈Bさんの証言〉

B「親に言わずに来たから処刑の前に、親に合わせてほしいと懇願したが（スパイだから生き

て返すわけにはいかないといわれたという。』

(3) 『沖縄県史10 沖縄戦記録2』773～774頁、沖縄県、1974年。

処刑の様子的一端を、沖縄県出身者で唯一、将校たちと行動を共にし、赤松隊長の副官と呼ばれる存在になった知念朝睦少尉は「沖縄県史」の制作にあたって、聞き取り調査に応じている。それによると、

「伊江島の男女4人が、投降勧告文書を持って、陣地に近づき、捕らえられ処刑されました。…その中の女性一人が生き還って逃げてしまったのです。基地隊の西村大尉は私を呼びつけ、おまえが逃がしたのだらうというので、私は非常にしゃくでした。今度は捕まえたので来てくれというので、行ってみると、女性は首を斬られて、頭がぐきりぐきりと小刻みにふるえていました。…この女性はすっかり観念し、刀じゃなく銃でやってくれとっていました。銃は敵に向けるべきものなのですが、私は自分の短銃で殺しました。」

犠牲となった伊江村民のことが証言されているが、名前が出ていないので、斬殺された「うちなんちゅう」への思いはどうであったのか、想像がつかない。

ここで注目したいは、処刑の残虐性と、知念少尉が処刑したのは男女4人と述べていることである。伊江村の男女青年6人であることは、「陣中日誌」(谷本版)にも記されていることであるが、筆者が、存命の証言者からたどる限りは4名までしか辿れなかった。もしかしたら、知念少尉の4名というのが正しいのかもしれない。「3名の女子青年と1人の中年男性の4人」だ正しいのか、今後さらなる精査が必要である。

知念少尉は、自分が処刑した者について、その名前を証言していない。知念の証言にある、追い打ちをかけて殺害されたのは、安里ヤス(安里安子)さんであることが伊江村民の証言から分かっている。

そのヤスさんの死については、切られて埋められた後に息を吹き返し、処刑場から逃れようとしたが、再度、知念副官の銃弾によって殺害されたのである。知念の言い分によれば、西村大尉の命令によって処刑したのである。沖縄県那覇市の首里の出身の知念は、沖縄出身であることから、渡嘉敷村民や伊江村民とも話が通じる、気持ちが通じる面があると、同情されたりもした。しかしながら、実際のところは、処刑の刀を振り下ろしたのである。斥候という役回りで、島内を巡回した知念は、うちなーぐちで話すことができることから、米軍の管理下の、伊江村民の強制移動させられた渡嘉敷集落にも出入りし、隊の本部で入用な物品を調達し、隊長に褒められていたとみられる。

そうした関係で、ヤスさんの家の関係者には物品の提供等で恩義のある関係であった。それで、伊江村民の処刑をするに際しても、ヤスさんに対しては多少の手加減があったとも思われる。もしかして、処刑後に生き返り、集落まで逃げおおせるかとも考えたかもしれない。しかしながら、取り逃がしかねない状況になっていることを、基地隊の西村大尉からとがめられ、結局は、知念の手によって銃殺されたのである。

その後出版された『沖縄県史各論編第6巻 沖縄戦』(2018年)には、この件に関する記載はみられない。

6 不思議なこと

(1) Aさんと呼ばしに、そして物資・衣類を調達にきた

〈Aさんの証言〉

A「だから日本兵がね、2度も私を連れに来てました。日本兵2人でね、ヨネさんと、ヤスサン、イリエさんがね、Aさんも来る予定だったけど残っているから一緒にね、あの一、こっちで過ごそうと言ってね、連れてきなさいと言って、私たちは行かされたよーってね。もう殺していたかもわからんけど、私を連れにきてました。」

麦「(処刑の後だとしたら)それは誘拐ですね。連れ去ろうとしたの?」

A「2回連れにきてました。また、2回目はね、私を連れに行くんじゃないで、 “砂糖があったらね持たせてくれ” って、“この3人が頼んでいるよ” って言うからね、私は隠れていたけど。叔父さんがね、こっちは砂糖も配給も無いから、砂糖私たちも食べたことないよ、砂糖も配給も無いからってね。30分おきに憲兵がまわっているから、“あんたがた早く帰らないと、憲兵4・5人でまわってるから撃ち殺されるよ” って言ったら、帰って行ったって」

麦「おじさんはなんて方?お名前」

A「兵隊追い返したおじさんですか?もう亡くなったけどね、並里さんと言ってね。うちの近くに家があったんですよ。戦後帰ってきて、この方がね30分おきにこっちまわってるから4、5人でまわってるから早く帰りなさいって」

Aさんが、仲間を思うあまり、日本兵の誘いに応じていたら、Aさんの命もなかったと思われる。また、この一連の日本兵の行動からうかがえるのは、投降勧告に行った一行は、すぐに殺害されたのではなく、いろいろな話を聴取されたのではないと思われる。そして、Aさんを誘うことにことさら悪意がないという前提に立てば、すべてが20歳代前半の将校たちにとって、若い女性が自分たちに加わってほしかったのかともとれるのである。しかしだとすれば、なぜ4人を処刑してしまったのか。スパイという容疑をつけてである。

(2) ヤスさんの家族のところにも

Bさんはヤスさんの弟にあたる。避難住宅は川側で、山側からは遠い方であったので、米兵の監視をかいぐり、訪ねてくるのは難しい場所にあるが、そこにも日本兵は来たという。ヤスさんに持たせてあげてほしいというので、お父さんは、物資をゆだねたという。しかしお父さんが物資を託したのは、無事であることと、会えるということを期待したからであった。日本兵は、どのような思いで物資を託されたのであろうか。

〈Bさんの証言〉

麦「そのあと日本兵がここの家に訪ねてきました?」

B「はい」

麦「なぜヤスさんの家だとわかったんでしょうね?」

B「たぶん聞いたんじゃないですかね。隣近所に聞けばわかりますからね。」

麦「その様子は、日本兵は処刑する前にどこの誰だか調べてってことですよ?でお父さんに兵隊は何か言ったんですか?訪ねてきて。」

B「私は見てないんですが。両親と話をしたと思います。」

麦「ヤスコさんに何か持たせるものを提供してくれと。」

B「はい毛布とか着物。娘は大丈夫だから元気であるから寒いから毛布を持たせてくれて頼んだそうです。親父は日本軍の兵隊の言葉の端々ちょっとおかしいなと思ったそうです」

麦「何度も来たんですか？」

B「1回だけです。」

麦「お父さんはどういうこと疑問に思いました？」

B「元気であれば会わせてほしい、健康状態いいのか、毛布だけでいいのか、いろいろ聞いてみたら、何かちょっと矛盾することあって、ちょっとおかしいんじゃないかなと思ったらしいです。」

麦「それでも持たせたんですね。」

B「持たせた。」

麦「日本兵きたのは1度だけね、川に近いほうの家のほうに、けっこう危険ですよ、よく訪ねてきて。」

B「それはたぶん夜だったんじゃないかと思うんですが。」

(3) 訪ねてきた日本兵：推定

渡嘉敷住民の聴き取りから、渡嘉敷村女子青年団長のKさんに思い入れていたのは、S少尉であったようだ(Iさん証言)。

斬殺されたヨネさんの親友であるAさんの避難住宅を訪ねた日本兵は、このS少尉ほかであったと思われる。ヨネさんが処刑となる前に、ヨネさんや伊江村やAさんのことを聞いたのではないか。

Aさんの避難住宅を訪ねたS少尉らの日本兵は、ヨネさんら伊江村の女子青年が、山中の赤松隊本部にいることを伝え、ヨネさんらのために、食料や衣類を提供するようにたのみ、またAさんにも来るように話したという。

しかし、その話を傍らできいていた伊江村男性(伊江村での近所の親しい男性で兵役経験者)は、危ない事態であることと察知し機転をきかせて「米兵の監視がわまってくるから危ない」と言って、日本兵を引揚げさせた。以後、Aさんが外部の者と接することがないように気配りをした。

日本兵は、ヨネさんの家族が避難している住宅も尋ね、ヨネさんの家が伊江島から持参した食料やヨネさんの衣類(和服)等を差し出したのだという。Aさんによれば、ヨネさんの家は裕福で、きれいな和服をもっていたし、また伊江島から馬を持ち込んでいたという。ヨネさんに物資を持たせるようにと要請すれば、上等の物が手に入ると期待したのであろうか。ヨネさんの家族は、その結果、上等な着物などを持たせたのだという。

6 処刑の日時

(1) 7月ではなく6月上旬

日本軍によって処刑された人々の順番や関連性を探っていくと、伊江村の一行が処刑された月日は7月に入ってからではないと思われる。渡嘉敷国民学校の訓導(教頭)である大城徳安さん、伊江村の男女6人、阿波連の男子青年(義勇隊)の2人、これらの3つの事件の処刑の順序や、正確な月日は解明できていない。おそらく6月から7月のあいだとおもわれるが、既存の文献・資料からは7月とされる記録も多く、また順序も不明である。

数々の証言をもとに推察すると、一連の事実は次のような順であることが自然である。①伊江村民が呼びかけに行く、②陣地に着いて（あるいはその途中で）とられる、即処刑ではなく話をきかれる、③〈そして処刑〉、しかし〈その処刑後に〉、④日本兵は渡嘉敷地区の伊江村民捕虜の避難住宅を訪ね、Aさん呼び寄せにくる、また物資の調達要請にくる、⑤ヨネさんの上等な着物は、日本軍兵士が目当ての女子青年にプレゼントしたものと思われる。差し出された上等な着物を、軍と行動を共にしていたごく一部の渡嘉敷女子青年団長のKさんが身につけていたのである。

だとすると、S少尉が戦死する前の時点が伊江村女子青年が、呼びかけに上がった日であろう。6月17日はS少尉らは、米軍が仕掛けた手りゅう弾によって爆死している日である。女子青年が処刑されたのは、その前ではないかと思われる。もし、陣中日誌の処刑日である7月2日が正しいということであれば、女子青年らはしばらく本部にいて生存していたことになる。投降勧告のために山に上がって、しかるのちに処刑された。という話が正しいのであれば、投降勧告に行ったのが6月6日で、その後、ほどなくして処刑されたと思われるし、ほどなくが、1日、2日の猶予があったのかどうかは定かではない。

伊江村の戦没者の資料で、いちばん正確と思われるのが、ヨネさんに関する記載で、それによると、6月6日が戦没日となっている。ヨネさんの記録について正確を期そうとした遺族や役場関係者が、6月6日としたのは、少なくとも、投降勧告の日が6月6日、その日に、一行が山へ上がったと記憶しているからではないだろうか。

(2) 処刑の時期は、鈴木少尉戦死の前とする

「陣中日誌(1970年版)」では、伊江島男女6人の処刑は7月2日のところに記載されている。「戦斗概要」でも、鈴木・小松原の爆死に続いて記載されている。

表5 陣中日誌の戦死記録では

<p>六月十七日 特務班長鈴木少尉敵側施設地雷堀出ノ際地雷ノ爆発ニ逢ヒ戦死ス 早朝石橋駐止斥候小松原少尉麾下小林伍長負傷 第二中隊中川上ト兵戦死ス 全夜石橋駐止斥候小松原少尉以下三名敵ノ施設セル地雷ニ觸レタルモノ、如ク所在不明トナル(戦死セルモノ、如シ)</p>	<p>六月十七日 早朝石橋駐止斥候小松原少尉麾下の勤務小隊、小林伍長負傷、第二中隊勤務小隊中川上等兵渡嘉敷に於いて戦死。 第二中隊斬り込隊長鈴木少尉敵陣地斬り込準備のため敵前の地雷掘出し除去作業中地雷爆発壮烈なる戦死を遂ぐ。 夜半過ぎ石橋駐止斥候小松原少尉以下三名(小松原少尉、永井軍曹、森上等兵)敵情偵察中敵の敷設せる地雷に触れたるものの如く、所在不明となる。(戦死せるものの如し)</p>
---	---

そう考えることと、伊江村の戦没者資料にある儀間イリエさんの戦没日が正しいかもしれない。伊江村名簿では、6月6日としている。このことは、次の渡嘉敷の証言とも符合する。

(3) 赤松隊本部壕近くにいた少年の記憶

当時子どもであったHさんは、家族ともどもいったん捕虜となり、座間味村の収容施設に入れられたのちに、治療を要しないないしは軽度の捕虜達と一緒に渡嘉敷島の阿波連地区に戻されている。渡嘉敷地区に住む伊江村民と同様に、住民が山へと避難したため、空き家の一部が米軍の捕虜収容施設となったのである。しかしながら、捕虜のみでありながら、捕虜ではない阿波連住民とやりとりをしていた父親は、赤松隊の本部に呼び出され監視下に置かれることになった。その結果、H少年も本部近くにいたので、軍が渡嘉敷村民や伊江村民を連行する様子を目撃したのである。

そのH少年の記憶によると、小嶺武次と金城幸太郎の2少年の処刑、大城徳安訓導の処刑、伊江村の男女の処刑の順序で、最後の伊江村民の処刑が7月であることはないと言う。

〈Hさんの証言〉連行の様子等を目撃している

麦「(こうした人たちが処刑され、連れていかれる様子を目撃したのは) 5月ぐらい？」

H「だって7月だったらさ、阿波連住民は全部恩納河原(ウンナガラ)に行ってるもん。」

麦「Hさんが本部に来てって言われる前に小嶺武次と金城幸太郎は処刑されてる。」

H「うん。ずっと前！」

麦「その後は、大城徳安さん？その順序も間違ってるのね？」

H「徳安のあとかな、伊江島の青年3名、女3名、あれも縛られていくの見た。」

麦「それ見てる？」

H「徳安さんのあと。だからあのときは伊江島の住民もう渡嘉敷に入ってるわけよ。だから部隊から。」

Hさんが言うには、7月ではぜったいないということ言う。5月から6月の早い時点である。阿波連の住民は、集団自決から1週間程度で、ケガの样子の軽度な捕虜について、一時収容した座間味から渡嘉敷島へ戻したという。それらを時間的に総合すると以下ようになる。

3つの事件のうち、第一の処刑が、阿波連の2少年の処刑で、これが5月上旬くらい。次に、大城徳安訓導の処刑で、これが5月中旬から6月上旬になる。その次が伊江村6人(4人?)の処刑で、6月上旬となる。伊江村の戦没者関係資料に記された儀間イリエさんの死亡状況の記録と符合すると考えると、6月6日である。このような処刑の順序と時期が妥当なのではないか。このほうが、S少尉の死が6月17日であることとも符合するのである。

伊江村からの強制避難者へのスパイ罪の適応が、僅かな糧秣を手に入れようとした朝鮮人軍夫(軍属)への非道の、見せしめ的な処刑へと、歯止めがきかなくなっていったと思われる。

7 終戦：山を下りる時期に

(1) 戻ってこない6人、女子3人、ヨネさん 一山を下りてきた人からきく

投降呼びかけに行った伊江村民男女の家族や友達は、男女が戻ってくるのを待っていたが、ついに、戻ってくることはなかった。

〈Aさんの証言〉

麦「この具志川さんと3人が山に行って、この女子青年3人が戻ってこない時どう思ってまし

たか？」

A「日本はもう負けているのにまだ負けていないと思ったんでしょうね、ヨネさんは。それで、赤松隊と一緒にいればもし自分の主人が還ってきたら捕虜になっていたらどうしようと言っていましたから。山に行かなければ良かったなあと思ってね。今でも思っています。」

...

A「8月15日ね。放送されてからみんな出てきたんですからね。そのときみんな山から出てきてから聞きました。Yさんからも聞きましたし、慶良間の女子青年たちも捕虜されて日本軍に死刑にされたらしいよと、見てはいないから、らしいと言っていました。見なかったの？と言ったら、死刑されるの夜だから誰も見てないと言っていました。」

麦「夜なんですか？」

A「夜されたという話、日暮れてから。」

麦「慶良間の女子青年で話してくれた人は誰ですか？」

キ「たくさん集まって…青年隊で聞いたんですから誰だったかわからない。生きて人たちみんな山から出てきて。伊江島の青年会があったんです、みんな集まって、“夜死刑されてる話聞ってるよ”って聞かせてました。みんな私の友達だったんだよって言った。」

...

A「川の側の土手にね穴掘らされて、ヤスさんは半斬りされてね、飛び出して、助け求めたら2度斬られたという話も聞いてますが。うん。川の側だったという話も聞いてます」

麦「1番の川イッピという川なので川の上流部、上流部の途中から山側にあがっていくと日本軍の陣地です。だからもし日本軍の陣地に向かったとすれば、こっちに途中から行っちゃったかもしれません」

A「渡嘉敷の人が分るでしょうね場所はね」

麦「途中が川なので穴掘らされて、でもヤスさんは逃れようとした、けども追いかけてさらに斬られた。ヨネさんは？」

A「ヨネさんはすぐ一発で斬られて亡くなったという話」

(2) 日本軍が投降後

伊江村の男女が処刑されたのだということは、軍よりも早く山を下りて投降した防衛隊員や、伊江村からの捕虜でありながら日本軍と連絡をとっていた元軍医経験者の男性(Yさん)から聞いた。伊江村の青年と渡嘉敷村の青年は集まってよく話し合ったという。伊江村の避難者は、山で何があったかについて、渡嘉敷村の青年から聞いたのだという。

投降を阻止するために銃を構える日本兵から狙撃を受けないように、用心に用心を重ねて策を練って、渡嘉敷村民は山を下りてきた。日本軍に先んじて投降した渡嘉敷の防衛隊員から山での様子をきいたヤスさんのお父さんは、娘が赤松隊によって処刑されたことに憤りを隠せなかった。

〈Bさんの証言〉

麦「7月、8月になって、日本兵がおりてくる前に住民が意を決して大挙しておりてくる。その時の様子って覚えてますか？」

B「僕らずっと後ろのほうで見てました。親父は赤松隊長に向かって、住民と一緒におりてき

たときに赤松隊長に向かって胸をわし掴みにして“叩き殺してやる”と言って転がしたそうですよ。そしたら米軍が中に入って“これは私たちに任せてください。裁判にかけて厳正に処分しますから”と言われて、だから引き下がったみたいですけどね。」

妻「ということは赤松隊長がおりてくる前に事情を知っている住民からなにかお父さん聞いた？」

B「あったと思いますたぶん。直接は聞いてないですがね。」

妻「7歳の子に聞かせる話じゃないと思いますが、あの人たちはすぐに処刑されたよみたいな話を」

B「あったと思います。」

妻「それが川の近くであったよと。のちのちにAさんも友だちがどうだったかって話を誰かに聞いて、ヤスさんは斬られてもいったん逃げようとしたという話は正春さんいつ知りました？」

B「Aさんから。これはまだ5・6年位前(2012, 2013年頃)ですよ。私が店に買い物しに行ったらいきなりですね、普通だったらみんな挨拶交わしてから話しますよね、いきなり私に会って“君のお姉さんはね”と。“君のお姉さんは、生殺しにあって、民家のほうに逃げて行って途中で川のところで倒れてしまって、あとから日本軍がきて追い打ちをかけて殺したんだよ”っていう話。これ初めてあの人から聞いた。」

妻「Aさんもヤスさんがどうだったかって話、Aさんもお年だしどうしても家族に言い伝えようと思ったんですかねその時に。」

B「Aさんに聞くまで知らなかった。その場で亡くなったと思ったわけで」

妻「(ヤスさんの)お父さんもそう思った？」

B「はい」

Bさんは、ヤスさんを処刑する命令を下した赤松隊長は、処罰されるのだろうと思っていた。米軍兵士は、自分たちが裁きますからと言って、父親をなだめたからだ。しかし、敗戦から25年たって、再び、赤松隊長に脚光が浴びた。その時Bさんは、赤松隊長はまだ生きているのだと驚いたという(注7)。自分の姉は、19歳のみそらで処刑されたのに、処刑した人は、なんのお咎めもないのである。戦争中の殺人について、加害者はほとんど責任を負うことがない。これが戦争災害の社会病理である。

(3) 渡嘉敷村の女子青年団長

8月下旬、日本兵と共に投降し、山から下りてきた渡嘉敷村の女子青年団長のKさんは、ヨネさんのあのきれいな着物を身につけていたという。いったい、どのような気持ちで、ヨネさんの服を着ていたのか、伊江村の女子青年はどのようにして処刑されたのだろうか。

Aさんは、その後、終戦後ずっと、そのことを、尋ねたい気持ちを持ち続け、渡嘉敷村の女子青年団長のKさんと会いたいと思っていた。Kさんは、伊江村民の死を、いまどのように思っているのだろうか。そう思い続けて年を重ねているうちに、Kさんはまだまだ若い年齢で亡くなってしまった。

(注7)「移送先の渡嘉敷島で姉失う」(沖縄タイムス、2006年12月8日)。

(4) やりきれない、日米の軍の病理

日本の降伏から1週間後まで続いた渡嘉敷島での戦闘が集結すると、遺骨の収集や火葬が行われた。ヤスさんの祖母は、遺骨のなかから真っ先にヤスさんの抜け殻を探し出したという。

〈Bさんの証言〉

B「たくさん死体あったと、おばあちゃんは言っていました。(その中から)これはうちの孫だとすぐわかったと。たくさんある中の死体を“これうちの孫だ”と言ってすぐ引き取ったとうちの親父がそう言ってました」

...

麦「集められた中で、おばあちゃんは靈感があるから？」

B「これはうちの孫だといってすぐ抱きしめたみたいですよ。だからひとつの遺体ではなかったと。結構ある中で見つけたと言ってました」

...

麦「遺骨の壺とかももらったんですか？」

B「壺に入れて」

麦「じゃあずっと大事に持って？」

B「はい今帰仁まで持って行って、行ってもすぐに島に戻れないものですからね。昭和22年(1947年)にしか戻れないものですからね、そこまですっと今帰仁のほうで」

(5) 処刑された様子

状況を知っている人から聞いた友達の最後は、悲惨なものであった。処刑されたのは、6人+1人(ないしは4人+1人)であった。ヨネさんが身ごもった赤ちゃんは、かなり発育していたそうで、その胎児も犠牲になったのである。処刑された母体の中で、胎児は絶望の淵に追いやられたのである。

〈Aさんの証言〉

キ「どんな状態で殺されたかは誰も見ていないしわからないけど。穴掘らされたということはきいています」

麦「それは渡嘉敷の防衛隊の誰かが言ってたんですかね？」

キ「男の人でしたけどね。ヨネさん、イリエさん、ヤスさんは穴掘らされてね、男の人と一緒に斬られたということ言ってました。」

麦「男の人は具志川さん？」

キ「私にこれ聞かせた人も亡くなったらしいんです。」

麦「それは(元軍医の)Yさん？」

キ「え？」

麦「(伊江島で捕虜となり渡嘉敷島へ移送された元)軍医の人？」

キ「殺された状態は誰も見てないからわからないけどね。」

...

麦「このうち今村ヨネさんは結婚していて、夫が南方に戦争に行っていて、こどもができたよっていったのね？お腹に赤ちゃんがいた。」

キ「はいおっきなお腹してました。」

妻「そしたら殺されたの3人じゃなくてお腹の子も入れたら4人ですね、女子青年。」

キ「はい、そのままお腹の子どもと一緒に亡くなった。お母さんは斬られてね、お腹の中でね、一週間は泣いたんでしょねって思ってるんですよ。殺された穴の中でね。お母さん斬られたからそのまま埋めたんでしょ。だから赤ちゃんはお腹の中でね一週間は泣いたんでしょねとみんな言ってますよ。」

伊江村民の青年男女6人が処刑されたとされてきた。このうち氏名で確認できたのは4名にとどまっている。処刑されたのは青年ばかりではなく、男性の〇〇さんは実年の男性であった。また、処刑されたうちのイリエさんは身ごもっており、母と胎児の2つの命が斬殺されたのである。

証言者のキクさんは、処刑された女子青年3人のことを想い、戦後、70有余年を経過したいまも、その当時の様子を可能な限り鮮明に語ろうとする。決して、忘れてはいけないうという決意がうかがえる。3人の女子青年のうちイリエさんについては、身ごもっていた胎児の命にも想像が及んでいる。胎児は、母が処刑されたのちも、母の胎内で生き続け、母の死の後に、生命線が立たれた結果、死に至ったことを今でも痛ましく思っている。

不思議なのは、S少尉らと思われる日本兵が、伊江村と通じ、物資の提供を求めるときに、伊江村の女子青年の名前を挙げ、ヨネさんのものを差し出すように、具体的に求めたのである。ヨネさんの家が裕福で、伊江島から渡嘉敷への強制移動させられる際にも、上等の物資を持参してきたことまで知らなければ、そうした要求は出せないのである。

そう考えると、伊江島の女子青年は、しばらく赤松隊の本部に拘束されたのちに、結局はスパイとして断罪されて処刑されたと考えられる。

女性青年の3人と一緒に、投稿勧告に行くつもりでいたAさんに対しても、本部で女子青年が待っているから、来なさいと勧誘されていたのはなぜなのか。このことも不可解な点である。物資だけではなく、若い女性を求めていたのだろうかともとれるのである。

この勧誘の危険は、Aさんのおじさんの機転により、難なくをえた。もし、勧誘されるままに、連れ去られたいたならば、Aさんの命もなかったと容易に想像がつく。

最終的に、赤松隊長が武装解除して、降伏文書に調印して、山を下りてくるときに、ヤスコさんのお父さんは、娘を処刑した責任者が、隊長であることを知っていた。なぜならば、赤松隊が組織的に降伏する前に、山を下りてきていた、島民の防衛隊員から、処刑のいきさつや様子を聞いているからである。

そこで、ヤスコさんの父親は、赤松隊長を決してゆるさない覚悟をもって、投降の隊列が来るのを待ち構えていた。そして、隊長めがけて襟首をつかみ、隊長の体を転がした。怒りに満ちた父親の殺気のみなぎっていたのだろう。しかしながら、直後に、米兵の押しとどめられて、引き離された。米兵は「自分たちが裁判で裁くから」と。

しかしながら、赤松隊長は、沖縄本島の収容所にいれられたものの、戦争中に村民を処刑したかどで裁かれることはなかった。知念副官も、N大尉も同様である。

沖縄戦は終わっていない。なぜなら、戦争中相手国と戦うのではなく、自国の国民を処刑した罪の贖罪ができていないからである。戦後、軍需産業のゼネコンに就職した知念元副官は、米軍ミサイル基地建設関連の仕事で、渡嘉敷島にたびたび来た。そこで、島民は、あなたは知

念さんではないかと尋ねたが、本人は「違います」と答えたそうである。

敵と戦うどころか、味方を殺した日本軍は、いったい何をどう後悔したのだろうか。事実と向き合い、戦争の犠牲死と向き合い、死の検証を経て、犠牲死者との対話を忘れるならば、再び同じことの再来を防ぐことはできないであろう。

自分には危険が及ばないという専断が「正常化の偏見」であり、他の人と同様にしていればよいが「同調性のバイアス」なのである。

結びに

本論から浮かび上がってくる課題は、まず、戦没者の命の格差、アンダークラス化を解消することであり、次に、沖縄県史の中に、この事実を含めること、また、伊江村の戦没者名簿資料の修正をすること、そして、渡嘉敷村白玉の塔の刻銘版に、少なくとも4名の名を追加することである。また、渡嘉敷村教育委員会設置の「赤松隊本部壕案内板」にも、少なくとも4名の名を加えること、そして、処刑日を7月2日から6月6日に修正することである。

人々が、命の格差という視点で、戦争の事実をリフレクティブに(再帰的に)考えることが特に重要である。



写真1 赤松隊本部壕案内板

〈参考文献〉

石原昌家『援護法で知る沖縄戦認識』（凱風社、2016年）。

戦争の社会病理 3 — 渡嘉敷島で処刑された 6 名の伊江村民

沖縄県教育委員会『沖縄県史第 10 巻 各論編沖縄戦記録 2』（1974 年）

沖縄県教育委員会編『沖縄県史各論編第 6 巻 沖縄戦』（2018 年）

海上挺進第三戦隊『陣中日誌』（辻版、1945 年）。

海上挺身第三戦隊『陣中日誌』（谷本版、1970 年）

川田文字「刻銘なき犠牲 沖縄にみる軍隊と性暴力 第二回—住民虐殺」（『世界』2015 年 10 月号）2015。

渡嘉敷村『沖縄戦記（座間味村渡嘉敷村戦況報告書）』（発行年不詳）。

渡嘉敷村遺族会編『慶良間列島渡嘉敷島の戦闘概要』（1953 年）。

知念正行『伊江島の基地と大戦の記録』（2018 年）。

〈参考サイト〉

15 年戦争資料@ wiki (赤松部隊の「陣中日誌」の原本と改本) :<https://w.atwiki.jp/pipopipo555jp/pages/2251.html>。